

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 2 日現在

機関番号：15401

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24330247

研究課題名(和文)聴取力と批評力を基盤とした音楽鑑賞能力の育成プログラム開発のための基礎的研究

研究課題名(英文)Basic study on the program development to foster the ability for appraising music based on the ability for listening and review

研究代表者

三村 真弓(Mimura, Mayumi)

広島大学・教育学研究科(研究院)・教授

研究者番号：00372764

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 13,500,000円

研究成果の概要(和文)：音楽鑑賞能力の基盤となる聴取力と音楽を感受する能力に関する調査研究を行った結果、音楽経験の量や質の違いが能力差に影響していることが明らかとなった。

各国の音楽鑑賞教育に関するカリキュラムを比較研究した結果、コンテンツ(知識と技能)、音楽科の本質に根ざしたコンピテンシー、汎用的なコンピテンシーの占める割合が国によって異なることがわかった。優れた指導法を研究した結果、聴取力の系統的な指導が全ての音楽活動の基盤をなすこと、また基礎的な能力を培う音楽活動を積み重ねることによって、聴取力や批評力が自然に育成され、音楽鑑賞能力につながる事が明らかとなった。

研究成果の概要(英文)：As a result of a research on the ability to listening and receive music to become the base of the ability for appraising music, it became clear that a difference of quantity and the quality of the music experience influenced abilities difference.

As a result of a comparative study on curricula about appraising music of concerned countries, the following facts were revealed. The ratio that contents (knowledge and skills), the subject-specific competencies in school music education, and generic competencies occupied varied according to concerned countries. As a result of a study on the superior instruction methods, it was cleared that systematic instruction of listening ability forms the basis of all music activities. The ability for listening and review is acquired naturally by repeating music activities to cultivate basic ability. This process leads to fostering the ability for appraising music.

研究分野：音楽教育学

キーワード：音楽鑑賞能力 聴取力 批評力

1. 研究開始当初の背景

我が国の戦前の一般的な音楽鑑賞教育は、目的に人格陶冶や美的陶冶を掲げつつも、作品に関わる音楽的知識の習得を内容とするものがほとんどであった。音楽鑑賞教育の萌芽期には、アメリカやイギリスでは appreciation (鑑賞) という言葉が使われていたが、現在は、ドイツでは musikhören (音楽聴取)、イギリスのナショナル・カリキュラムのキーステージ 1 及び 2 (2007) では responding and reviewing-appraising skill (反応と批評・評価技能) と listening, and applying knowledge and understanding (聴取及び知識と理解の応用)、キーステージ 3 (2007) では listening (聴取) と reviewing and evaluating (批評と評価)、アメリカの全米芸術教育標準 (1994) では listening to, analyzing, and describing music (音楽の聴取・分析・説明) が挙げられ、到達規準として内容が詳細に明記されている。一方、我が国の平成 20 年改訂小学校学習指導要領 (音楽) の鑑賞の内容には、音楽の諸要素を「感じ取って聴くこと」「理解して聴くこと」「楽曲の特徴や演奏のよさを理解すること」が挙げられ、中学校学習指導要領 (音楽) の鑑賞の内容には、「…を理解して聴き、…音楽のよさや美しさを味わうこと」「…理解して、鑑賞すること」が挙げられている。いずれも曖昧な記述であり、詳細な内容や具体的な到達目標は示されていない。また、「言語活動の充実」を受け、鑑賞領域において、「言葉で表す」(小学校)、「言葉で説明する」「根拠をもって批評する」(中学校) ことが示された。このことは、批評力の育成に関連するであろう。しかし現実的には、説明や批評の根拠となるのは、音楽的知識としての音楽の諸要素等に過ぎず、それらを感じる音楽的感覚と、知覚するための識別能力を育成する必要性は未だ認識されていない。

これまでに、本研究者たちは音楽科の学力とは何かについて追究してきた。その結果、音楽科の学力の根底には、音楽的感覚と聴取力 (内的聴取力及び外的聴取力) と音楽的語彙が位置づくことが明らかとなった。これらを音楽科教育の重要な基礎と捉え、これらの能力のうえに楽典的知識、視唱力・視奏力、批評力等の基本が位置づき、さらにそれらの上位に表現力と鑑賞力が位置づくという、逆ピラミッド型の学力構造を明らかにした。

音楽鑑賞教育の最終目的は、音楽のもつメッセージを受容し、美的価値判断ができるようになることである。メッセージを受容するためには音楽の諸要素や構造等を聴取する能力が必要とされ、美的価値判断を行うためには批評する能力が必要とされる。したがって、音楽鑑賞能力の育成には、聴取力と批評力が基盤となるべきであるという結論に達し、本研究を着想するに至った。

2. 研究の目的

本研究の目的は、聴取力と批評力を基盤とした音楽鑑賞能力の育成プログラムを開発するための基礎的研究を行うことである。

3. 研究の方法

本研究では、2 つの柱に沿って研究を進めた。第 1 は、聴取力と批評力に関する調査研究である。それぞれの調査方法を開発し、調査を実施することによって、調査方法の有効性を明らかにした。また、音楽経験の有無と聴取力との関連性、音楽経験の有無と批評力との関連性、聴取力と批評力との関連性について調査を行った。

第 2 は、我が国及び諸外国における音楽鑑賞教育に関するカリキュラムと優れた指導法の研究である。カリキュラムの研究は、主としてアメリカとイギリスを取り上げ、比較研究としては、日本、ドイツ、イギリス、アメリカを対象とした。優れた指導法としては、岐阜県古川小学校を中心として行われた「ふしづくりの教育」と、スペイン・カタルーニャ州グラノリエース市立ペラアントン校の実践を主として取り上げた。

4. 研究成果

(1) 調査研究

聴取力の調査方法に関しては、全国規模で行われた過去 2 回の音楽科学力調査 (1958 年度、1966 年度) と、全国の国公立学校から無作為抽出された学校の児童・生徒を対象として行われた「特定の課題に関する調査 (音楽)」(2008 年度) の内容を比較検討して、「聴取力に着目した音楽科学力調査」を独自に開発した。中学 1 年生を対象として調査を実施した結果、2 つの成果があがった。評価しにくい学力の 1 つである音楽的感覚の修得状況、及び表現・鑑賞の能力の最も基礎に位置づけられる聴取力の評価について、方法論上の有効性を見いだすことができたこと、小学校音楽科教育で、何がどの程度到達できているのか否かがある程度明らかになったことである。特に、過去の音楽科学力調査では注目されていなかった、授業以外での音楽経験の有無に着目することによって、授業以外での音楽学習経験がない児童が小学校音楽科教育のなかでどの程度の学力を獲得しているのかが明示されたといえる¹⁾。また、この調査方法を使って、オーケストラ学習を取り入れている小学校の児童と一般の音楽科授業を行っている小学校の児童との比較研究を行い、オーケストラの学習経験によって、どの音楽能力が獲得されたのかが明らかとなった²⁾。

批評力に関しては、言葉で批評した内容の正当性や質の高さ等を客観的に判定することが難しいので、批評力の基盤となる、音楽を感じる能力を調査対象とすることにした。本研究者たちがこれまでに行ってきた、音楽を感じる能力に関する調査研究³⁾をもとに、自由記述に加えて、評価語を用いた尺

度上で印象評価を行うことによって、音楽感受の様相を客観的に捉えることができる調査方法を開発した。この方法を用いて、音楽経験の蓄積が音楽の質的内容を感受する能力にどのような影響を与えるのかを明らかにするために、大学生と中学生を対象として、音楽の質的内容を感受する様相を測定した。音楽感受尺度を因子分析した結果、音楽感受に関わる「活発性」「穏和性」「沈鬱性」の3因子を抽出した。統計分析を行った結果、聴取する曲の質や雰囲気によって、音楽感受の仕方に音楽経験の差が認められること、「沈鬱性」の感受について、音楽経験の多い大学生は聴取した音楽を分析的に解釈し、価値判断を明確に行うが、音楽経験の少ない中学生は音楽の印象を直接的に捉え、感情に流される傾向にあること、男女差を比較すると、男は音楽の価値判断に矛盾や不明瞭さが見られる傾向にあることが明らかとなった。この研究の成果として、第1に、感受の仕方を客観的に捉えるためのツールとして、音楽感受尺度の妥当性が確認できたこと、第2に、音楽感受の様相が音楽経験の蓄積によって異なることが明らかになったことが挙げられる⁴⁾。

聴取力と音楽を感受する能力との関連性を明らかにするために、中学1年生を調査対象として、聴取力に着目した音楽科学力調査と、音楽を感受する能力に関する調査をそれぞれ別の日に行った。分析した結果、聴取力と音楽を感受する能力との関連性には強い相関は見られなかった。その原因として、調査対象とした生徒に聴取力が十分に獲得されておらず、成績に顕著な差がなかったことが考えられる⁵⁾。今後は、調査対象を高校生や大学生に広げ、高い聴取力の被験者が音楽を感受する力と、低い聴取力の被験者が音楽を感受する力との違いに関して明らかにすることが課題である。

以上の調査研究から、聴取力と音楽を感受する能力には、音楽経験の蓄積の度合いが影響していることがわかった。ただし音楽経験の量だけでなく質も大きく影響することが推察される。

(2) カリキュラムと指導法の研究

○ カリキュラムの研究

アメリカの全米芸術教育標準(1994)では、9つの「内容標準」が示されており、そのなかで音楽鑑賞教育にかかわるものは、「音楽の聴取・分析・説明」であった。全米コア音楽標準(2014)では、「創造」「演奏」「反応」「関連性」の4つの芸術プロセスが示されている⁶⁾。「反応」の領域は従来の聴取に関する領域との類似点をもつものの、反応領域は聴取という特殊な活動に限定されていない。音楽を聴くための基盤となる能力はその他の活動でも基盤になるものであり、創造や演奏の領域の学習のプロセスにもその能力の育成の機能が分有される構造になっている⁷⁾。

一方、「反応」のなかに含まれる「分析」「解釈」「評価」などの内容は、音楽鑑賞の重要な構成要素でもある。聴き方の訓練に限定されず、理解を伴う音楽の評価能力を養うという意味では、批評力育成ともいえよう。幼年期から一貫して、音楽を文脈や目的・意図に照らしてメタ的に評価することを強調する点は、全米コア音楽標準における評価の特徴である⁸⁾。

イギリスの就学前教育カリキュラム(2012)と小学校ナショナル・カリキュラム(1999)を検討した結果、幼児の主体的な音の探求を重視し、音を変化させたり組み合わせたりすることを通して、音や音楽による雰囲気や効果に気づくように援助がなされていること、それは遊びの文脈やイメージと深く結びついた形で育まれ、小学校にて音を知覚し、感受する経験につながり、発展していくことが明らかとなった⁹⁾。

日本の学習指導要領・音楽(2008)、ドイツ・ハンブルグ州の音楽科教育プラン(2011)、イギリスのナショナル・カリキュラム音楽(2013)、アメリカの全米コア音楽標準(2014)における鑑賞・聴取領域の内容を比較・検討した結果、以下のことが明らかとなった。イギリスの音楽カリキュラムでは、音楽科の本質に関わるコンピテンシーが多くを占めている。ドイツ・ハンブルク州の音楽カリキュラムには、コンテンツに加えて、音楽の本質に関わるコンピテンシーが含まれており、その一部は汎用的コンピテンシーにも繋がっていることが確認できた。アメリカの音楽カリキュラムには、汎用的コンピテンシーが多く、音楽の知識のコンテンツはあるものの、それに関わるスキルのコンテンツ、例えば聴取力や識別力や感受力や知覚力は含まれていない。一方、日本の音楽カリキュラムは主としてコンテンツベースであることがわかった¹⁰⁾。

○ 指導法の研究

スペイン・カタルーニャ州グラノリエース市立ペラアントン校では、「子どもが育つ音楽教育」というプロジェクトを実施している。同校は幼小一貫校であり、3歳児から小学校6年までの9年間で、体系的な音楽教育と即興ダンスを行っている。特に力を入れているのが、ヴィレムスの理論に即した聴取力指導であり、身体表現やヴィレムスの楽器を使って、音楽的感覚や聴取力を系統的に育成している。音楽と即興ダンスとは密接な関係を持ち、相互作用によって子どもの音楽的感性を育成している。これによって、言語能力の乏しい移民の子どもだけでなく、学習障害のある子どもも、音楽やダンスの授業では、自由に自己表現をすることができ、音楽による人間教育が成立しているのである¹¹⁾。

昭和40年代に、岐阜県古川小学校で行われた「ふしづくりの教育」の特徴は、子どもの音楽的感覚や音楽能力の基盤形成に有益

な活動を繰り返し行うこと、誰にでも指導することが可能な段階的・系統的カリキュラムとふしづくりの指導法を確立したこと、教師が主導する場面はほとんどなく子どもたちが主体的に音楽の授業の進行を担当していたこと、等であった。これらの積み重ねによって、聴取力や批評力が自然に育成され、音楽鑑賞能力に繋がっていたことが明らかとなった¹²⁾。

<引用文献>

- 1) 伊藤真、三村真弓、吉富功修、聴取力に着目した音楽科学力の評価に関する調査研究 - 小学校音楽科教育における学力保障の視点から -、音楽教育実践ジャーナル、10 巻 1 号、2012、pp.78-89
- 2) 松本進之助、松本進、三村真弓、伊藤真、吉富功修、常葉大学教育学部附属小学校におけるオーケストラ学習が育む音楽能力 - 聴取力に着目した音楽科学力調査の結果から -、音楽学習研究、10 巻、2015、pp.29-38
- 3) 三村真弓、光田龍太郎、松前良昌、桑田一也、吉富功修、高旗健次、藤井恵子、中学校における音楽科の学力を確かなものとする教育プログラムの開発(3) - 中学生の批評能力及び鑑賞能力に着目して -、学部・附属学校共同研究紀要、38 号、2010、pp.167-172
三村真弓、伊藤真、泉谷正則、桑田一也、原寛暁、増井知世子、松前良昌、光田龍太郎、藤井恵子、中学校・高等学校音楽科における聴取力育成プログラム開発のための基礎的研究(1) - 聴取力に着目した音楽科学力調査をとおして -、学部附属学校協同研究紀要、39 号、2011、pp.153-158
光田龍太郎、伊藤真、三村真弓、泉谷正則、桑田一也、原寛暁、増井知世子、松前良昌、藤井恵子、中学校・高等学校音楽科における聴取力育成プログラム開発のための基礎的研究(2) - 音楽を感受する能力測定方法の検討 -、学部附属学校協同研究紀要、40 号、2012、pp.165-170
- 4) 伊藤真、三村真弓、吉富功修、音楽経験が音楽を感受する能力に与える影響、音楽学習研究、9 巻、2014、pp.1-12
- 5) 三村真弓、吉富功修、伊藤真、別府祐子、音楽鑑賞能力に関する研究 - 聴取力と音楽を感受する力の関連性に着目して -、教育学研究紀要 (CD-ROM 版)、61 巻、2016、pp.602-607
- 6) 峯恭子、全米コア音楽標準 (2014) にみる構成の特徴 - 全米芸術教育標準 (1994) との比較を通して -、教育学研究紀要 (CD-ROM 版)、61 巻、2016、pp.275-280
- 7) 武内裕明、米国コア音楽標準草案における聴取の扱い - 第 8 学年までの標準の検討を通じて -、弘前大学教育学部紀要、111 号、2013、pp.113-119
- 8) 武内裕明、米国コア音楽標準における幼年期の批評力育成、教育学研究紀要 (CD-ROM 版)、61 巻、2016、pp.482-487

- 9) 藤掛絢子、北野幸子、三村真弓、音楽領域における幼小接続期カリキュラムの検討 - イギリスとアメリカの比較を中心に -、国際幼児教育研究、21 号、2014、pp.17-25
- 10) 三村真弓、伊藤真、峯恭子、松下友紀、吉富功修、井本美穂、各国の音楽カリキュラムにおける鑑賞・聴取領域の内容に関する研究 - コンテンツベース、コンピテンシーベースの視点を中心に -、音楽文化教育学研究紀要、28 巻、2016、pp.5-14
- 11) 三村真弓、ロサリオ・マルティネス、アナ・ファレス、吉富功修、伊藤真、ジュゼプ・フェラン・ガリシア、子どもが育つ音楽教育 - スペイン・カタルーニャ州グラノリエース市のペラアントン校における実践 -、音楽教育学、44 巻 2 号、2014、pp.85-89
三村真弓、ラウラ・アスパウレヤ、カルメン・ナヘラ・ムルガデヤ、吉富功修、伊藤真、ジュゼプ・フェラン・ガリシア、子どもが育つ音楽教育(2) - ペラアントン校におけるヴィレムスの聴取力指導、及び即興ダンス -、音楽教育学、45 巻 2 号、2015、pp.69-73
- 12) 三村真弓、吉富功修、伊藤真、井本美穂、岐阜県古川小学校における「ふしづくりの教育」の音楽教育及び人間教育としての意義 - 昭和 40 年代後半の音楽科授業の実践に注目して -、音楽学習研究、10 巻、2015、pp.61-72

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計 30 件)

- 1) 三村真弓、伊藤真、峯恭子、松下友紀、吉富功修、井本美穂、各国の音楽カリキュラムにおける鑑賞・聴取領域の内容に関する研究 - コンテンツベース、コンピテンシーベースの視点を中心に -、音楽文化教育学研究紀要、28 巻、査読無、2016、pp.5-14
- 2) 三村真弓、吉富功修、伊藤真、別府祐子、音楽鑑賞能力に関する研究 - 聴取力と音楽を感受する力の関連性に着目して -、教育学研究紀要 (CD-ROM 版)、61 巻、査読無、2016、pp.602-607
- 3) 吉富功修、三村真弓、長澤希、岡山県倉敷市立茶屋町小学校における「ふしづくりの教育」 - 第 6 学年の実践 (昭和 52 年) -、教育学研究紀要 (CD-ROM 版)、61 巻、査読無、2016、pp.608-613
- 4) 武内裕明、米国コア音楽標準における幼年期の批評力育成、教育学研究紀要 (CD-ROM 版)、61 巻、査読無、2016、pp.482-487
- 5) 峯恭子、全米コア音楽標準 (2014) にみる構成の特徴 - 全米芸術教育標準 (1994) との比較を通して -、教育学研究紀要 (CD-ROM 版)、61 巻、査読無、2016、pp.275-280
- 6) 上野智子、全米コア芸術標準 (2014) にみる音楽科におけるインクルージョンに関する一考察、教育学研究紀要 (CD-ROM 版)、61 巻、査読無、2016、pp.234-239

- 7) 池田明子、長澤希、三村真弓他(全11人、11番目) 幼小接続期におけるカリキュラムの開発 - 幼稚園教員による小学校授業への参加を通して -、学部・附属学校共同研究紀要、44巻、査読無、2016、pp.177-183
- 8) 池田明子、井上弥、三村真弓、幼小接続期におけるカリキュラム開発の基礎的研究 - ねらい、教材、環境構成の視点から -、乳幼児教育学研究、24巻、査読有、2016、pp.59-66
- 9) 吉富功修、三村真弓、わが国の音楽科における共通教材に関する研究 - 中学校音楽科における《モルダウ》を視点として -、音楽文化教育学研究紀要、28巻、査読無、2016、pp.15-24
- 10) 三村真弓、ラウラ・アスパウレヤ、カルメン・ナヘラ・ムルガデヤ、吉富功修、伊藤真、ジュゼブ・フェラン・ガリシア、子どもが育つ音楽教育(2) - ペラアントン校におけるヴィレムスの聴取力指導、及び即興ダンス -、音楽教育学、45巻2号、査読無、2015、pp.69-73
- 11) 三村真弓、吉富功修、伊藤真、井本美穂、岐阜県古川小学校における「ふしづくりの教育」の音楽教育及び人間教育としての意義 - 昭和40年代後半の音楽科授業の実際注目して -、音楽学習研究、10巻、査読有、2015、pp.61-72
- 12) 松本進之助、松本進、三村真弓、伊藤真、吉富功修、常葉大学教育学部附属小学校におけるオーケストラ学習が育む音楽能力 - 聴取力に着目した音楽科学力調査の結果から -、音楽学習研究、10巻、査読有、2015、pp.29-38
- 13) 三村真弓、吉富功修、1960年代の東京教育大学附属小学校音楽科における基礎能力観 - 『音楽科 基礎能力と授業構造』に着目して -、教育学研究紀要(CD-ROM版)、60巻、査読無、2015、pp.481-486
- 14) 吉富功修、三村真弓、伊藤真、井本美穂、わが国の音楽教育における学力観、教育学研究紀要(CD-ROM版)、60巻、査読無、2015、pp.487-492
- 15) 池田明子、長澤希、三村真弓他(全12人、12番目) 幼小接続期における感じる・考える・表す活動の開発 - かかわりを誘発する環境構成を通して -、学部・附属学校共同研究紀要、43巻、査読無、2015、pp.213-222
- 16) 三村真弓、ロサリオ・マルティネス、アナ・ファレス、吉富功修、伊藤真、ジュゼブ・フェラン・ガリシア、子どもが育つ音楽教育 - スペイン・カタルーニャ州グラノリエス市のペラアントン校における実践 -、音楽教育学、44巻2号、査読無、2014、pp.85-89
- 17) 藤掛絢子、北野幸子、三村真弓、音楽領域における幼小接続期カリキュラムの検討 - イギリスとアメリカの比較を中心に -、国際幼児教育研究、21号、査読有、2014、pp.17-25
- 18) 三村真弓、吉富功修、中村隆夫、伊藤真、昭和30年代から50年代の岐阜県飛騨地方における中村好明の音楽教育観、音楽学習研究、9巻、査読有、2014、pp.37-48
- 19) 伊藤真、三村真弓、吉富功修、音楽経験が音楽を感受する能力に与える影響、音楽学習研究、9巻、査読有、2014、pp.1-12
- 20) 三村真弓、吉富功修、伊藤真、田中教育研究所音楽研究部編「音楽素質診断テスト」に関する研究、教育学研究紀要(CD-ROM版)、59巻、査読無、2014、pp.622-628
- 21) 三村真弓、岐阜県古川小学校におけるふしづくりの教育の理念と指導法の特徴 - 山崎俊宏の著書及び研究報告の検討をとおして -、広島大学大学院教育学研究科紀要第二部、62号、査読無、2013、pp.347-356
- 22) 武内裕明、米国コア音楽標準草案における聴取の扱い - 第8学年までの標準の検討を通じて -、弘前大学教育学部紀要、111号、査読無、2013、pp.113-119
- 23) 三村真弓、吉富功修、中村隆夫、伊藤真、昭和10年代～20年代の岐阜県高山市における中村好明の音楽教育改善の試み、音楽学習研究、8巻、査読有、2013、pp.1-11
- 24) 吉富功修、三村真弓、岐阜県古川小学校の「ふしづくりの教育」を支えた中家一郎校長の音楽教育観(1)、音楽文化教育学研究紀要、25巻、査読無、2013、pp.37-44
- 25) 三村真弓、吉富功修、岐阜県古川小学校の「ふしづくりの教育」を支えた中家一郎校長の音楽教育観(2)、音楽文化教育学研究紀要、25巻、査読無、2013、pp.45-52
- 26) 三村真弓、吉富功修、信州大学附属松本小学校における音楽の基礎能力診断調査(昭和43年度)に関する研究、教育学研究紀要(CD-ROM版)、58巻、査読無、2013、pp.434-439
- 27) 吉富功修、三村真弓、島根県教育委員会編『小学校・中学校音楽科能力表(試案)(昭和27年度)』に関する研究 - 小学校を中心として -、教育学研究紀要(CD-ROM版)、58巻、査読無、2013、pp.428-433
- 28) 三村真弓、吉富功修、松永洋介、中村隆夫、山崎俊宏、岐阜県におけるふしづくりの音楽教育成立の軌跡、音楽教育学、42巻2号、査読無、2012、pp.72-76
- 29) 伊藤真、三村真弓、吉富功修、聴取力に着目した音楽科学力の評価に関する調査研究 - 小学校音楽科教育における学力保障の視点から -、音楽教育実践ジャーナル、10巻1号、査読有、2012、pp.78-89
- 30) 三村真弓、比較聴取による歌唱表現の工夫を意図した音楽科授業 - 充実した言語活動を媒介として -、学校教育、1144号、2012、pp.32-37

〔学会発表〕(計 25件)

- 1) 三村真弓、音楽能力発達の至適時期、日本発達学会第14回大会、2016年3月6日、

- 神戸大学（兵庫県・神戸市）
- 2) 三村真弓、ラウラ・アスパウレヤ、カリメン・ナヘラ・ムルガデヤ、吉富功修、伊藤真、ジュゼブ・フェラン・ガリシア、子どもが育つ音楽教育(2) - ペラアントン校におけるウィレムの聴取力指導、及び即興ダンス -、日本音楽教育学会第 46 回大会、2015 年 10 月 4 日、フェニックス・シーガイア・リゾート（宮崎県・宮崎市）
 - 3) Josep FERRAN, Laura ESPAULELLA, Anna FARRES, Mayumi MIMURA, Katsunobu YOSHITOMI, Miho IMOTO, Shin ITO, Interdisciplinary project: "Alfresco Concert" - Primary research in the Pereanton school of Granollers; Catalonia, EECERA 25th Conference, 8th September 2015, Barcelona (Spain)
 - 4) 吉富功修、三村真弓、伊藤真、「ふしづくりの教育」における授業の実際 - 第 3 学年の授業を中心として -、日本音楽教育学会第 45 回大会、2014 年 10 月 26 日、聖心女子大学（東京都・渋谷区）
 - 5) Mayumi MIMURA, Katsunobu YOSHITOMI, Shin ITO, Miho IMOTO, Sachiko KITANO, Kyoko MINE, Music Education for Preschool Children in Escola Pereanton Spain, The 15th PECERA Annual Conference, 9th August, Bali (Indonesia)
 - 6) 吉富功修、三村真弓、伊藤真、「ふしづくりの教育」における授業の実際 - 第 4 学年（滝上定江教諭）の授業を中心として -、音楽学習学会第 10 回研究大会、2014 年 7 月 26 日、埼玉大学（埼玉県・さいたま市）
 - 7) 三村真弓、吉富功修、中村好明の教材構成観の変遷 - 『音楽のおけいこ』『そうさくのおけいこ』『ふしづくりのおけいこ』の分析を通して -、日本教科教育学会第 39 回全国大会、2013 年 11 月 23 日、岡山大学（岡山県・岡山市）
 - 8) 三村真弓、吉富功修、伊藤真、昭和 30 年代～50 年代の岐阜県飛騨地方における中村好明の音楽教育観の変遷、第 9 回音楽学習学会・第 1 回亜州教育学会合同大会、2013 年 8 月 19 日、茨城大学（茨城県・水戸市）
 - 9) 吉富功修、三村真弓、岐阜県古川小学校の「ふしづくり一本道」を支えた中家一郎校長の教育観、日本教科教育学会第 38 回全国大会、2012 年 11 月 3 日、東京学芸大学（東京都・小金井市）
 - 10) 三村真弓、ハンガリーの就学前音楽教育における歌唱教材、国際幼児教育学会第 33 回大会、2012 年 9 月 29 日、函館短期大学（北海道・函館市）
 - 11) 三村真弓、吉富功修、昭和 20 年代～30 年代の岐阜県高山市における音楽教育改善の試み - 中村好明の活動を中心に -、音楽学習学会第 8 回大会、2012 年 8 月 28 日、関西学院大学梅田キャンパス（大阪府・大阪市）
 - 12) . Mayumi MIMURA, Katsunobu

YOSHITOMI, Shin ITO, Yuuya SAKAI, Ryo HASWAGAWA, Early Childhood Music Education in Hungary: Focusing on Transition from Kindergarten to Elementary School, PECERA 13th Annual Conference, 22 July 2012, Singapore 他 13 件

6. 研究組織

(1) 研究代表者

三村 真弓（MIMURA, Mayumi）
 広島大学・大学院教育学研究科・教授
 研究者番号：00372764

(2) 研究分担者

吉富 巧修（YOSHITOMI, Katsunobu）
 広島大学・大学院教育学研究科・名誉教授
 研究者番号：20083389

伊藤 真（ITO, Shin）
 広島大学・大学院教育学研究科・准教授
 研究者番号：70455046

北野 幸子（KITANO, Sachiko）
 神戸大学・人間発達環境学研究科・准教授
 研究者番号：90309667

水崎 誠（MIZUSAKI, Makoto）
 東京学芸大学・教育学部・准教授
 研究者番号：50374749

藤原 志帆（FUJIHARA, Shiho）
 熊本大学・教育学部・准教授
 研究者番号：20381022

福島 さやか（FUKUSHIMA, Sayaka）
 福岡女学院大学・人間関係学部・准教授
 研究者番号：40625901

武内 裕明（TAKEUCHI, Hiroaki）
 弘前大学・教育学部・准教授
 研究者番号：50583019

小長野 隆太（KONAGANO, Ryuta）
 鈴峯女子短期大学・保育学科・准教授
 研究者番号：60452603

上野 智子（UENO, Tomoko）
 和歌山大学・教育学部・准教授
 研究者番号：80583939

峯 恭子（MINE, Kyoko）
 大阪大谷大学・教育学部・講師
 研究者番号：90611187

山中文（YAMANAKA, Aya）
 高知大学・教育研究部人文社会科学系教育
 学部門・教授
 研究者番号：10210494